

第 257 回研究報告会 (2 月 28 日)

“社会内存在”としての宗教—とくに「3・11」以降の動向をふまえての理念的考察—

金子 昭

宗教もまた公共社会の一員であり、社会との関わりの中で人々の信仰的な営みが行われる。ここで“社会内存在”としたのは、単に社会的存在（社会的側面をもった存在）というよりも強い意味、すなわち自分と社会が相互に浸透しているという意味を込めている。発表では、そうした意味での宗教について、とくに「3・11」以降に見えてきた日本の宗教の状況について論じ、天理教も含めた宗教の今後の社会活動はどうあるべきか、考えるところを述べた。

たしかに近年、宗教を取り巻く社会的状況はきびしい。それは伝統宗教、新宗教に関わらず、置かれた状況は同じである。しかし、その一方で、人々もまたこの社会の中で苦境の中に置かれている。DV、虐待、不登校、引きこもり、アルコール依存症、リストラ、多重債務、貧困、中高年の自殺など、事例に事欠かない。これらはいずれも、天理教の言葉で言えば、「身上（身体的不都合）」ではなく「事情（社会的不都合）」に問題が集中していると言える。

こうした諸問題に、宗教がいかに応答できるかによって、“社会内存在”としての宗教の存在意義が問われてくる。天理教の場合、災害救援ひのきしん隊や養育里親など、“社会内存在”としての底力はきわめて大きい、それ以外の場面でなしうる社会的貢献もまた数多く存在する。

とくに最近、社会的な孤立というものが問われている状況では、「この人にだれが必要なのか？」と言われた場合、「だれ」のところ自分の名前がすぐに入るくらい、宗教者が社会へと積極的に乗り出して関わっていくことがますます求められてこよう。

「3・11」後の宗教界の動向として特筆すべきことは、それまでかまびすしく論議されていた葬式仏教批判がびたりと止まったことである。これは、多くの仏教関係者が指摘している。津波による大量死という事態に直面して、葬祭支援のニーズがあることが今さらながらに注目されたのである。葬祭は仏教、村祭は神道といったように、習俗に深く関わる伝統宗教の強みは確かにある。その地域に数百年存在してきた寺社は地域のスピリチュアルな中心であり、したがって地域起こしの中心ともなるのである。残念ながら、このような形では、新宗教の“出番”はほとんど無い。

けれども、伝統宗教側のそうした“独壇場”に対しては、一つの盲点が生じている。それは、既存の縁（地縁、血縁）や伝統文化などを再生させる動きには、そうした縁や伝統文化に属さない人々を排除する思想もまた同時に進行しているということだ。

なお、宗教の社会参画には、(1) 社会での実践活動と (2) 社会に向けての声明発信という 2 種類がある。

(1) 宗教活動の定義は多義的であり、どの定義を採用するかによって宗教活動の範囲も異なってくる。「信仰にもとづく

あらゆる活動が宗教活動である」とするのが最広義とするならば、「その宗教内部の活動をするのが宗教活動である」というのが最狭義となる。信仰者の社会活動は、前者の定義ではじゅうぶん宗教活動となるが、そうでない場合は条件つきでの宗教活動（当該宗教においては主流ではない活動）という位置づけになる。

(2) 生命倫理、原発問題などに対する宗教者の社会的発言の重みは、その社会における宗教の評価を反映するところがある。宗教者は肩書きではなく、“生きざま”である。社会の中にあつて社会を超える視座と生き方が宗教者には求められるだろう。

発表の最後では、宗教を“社会内存在”として展開させていくための条件として、①社会に対してどの程度、自らをオープンにできているか、②自らの中において、どれだけ風通しがよい状態になっているか、③社会の動きやニーズにどれだけかみ合った態勢をとって動いているか、④社会の価値観に染まらず、どこまでも宗教としての超越的な価値観を提示でき、それを信仰者の態度として示しているか、の 4 点を提示した。

第 58 回伝道研究会 (3 月 5 日)

「天理教の文化活動としての日本語教育」

天理教語学院 日本語教育センター主任
大内泰夫

はじめに

天理教の日本語教育は、半世紀前、二代真柱が戦後初めて海外を巡教した折、ハワイ、アメリカの二世への縦の伝道が話題となり、おちばでの仕込みの必要性を感じたことから始まった。天理大学選科日本語科、別科日本語課程を経て、現在、海外子弟の育成は天理教語学院がその任を引き継いでいる。また海外では天理教海外部が管轄する拠点で日本語学校、あるいは日本語教室という形で日本語教育が行われている。現在、日本語教育を行っている拠点はパリ、ニューヨーク、シンガポール、香港があり、それ以外にも伝道庁、出張所で日本語教室が開かれており、青年会・婦人会海外人材派遣生が授業を担当している。このように天理教の日本語教育は世界中で広く展開している。

文化活動としての日本語教育

この文化活動としての日本語教育には、過去の資料によれば、①布教の後方支援、②現地の人々との接点を作る、③広告塔としての役目があると思われる。しかし、拠点ごとの事情もあり、現地の人との接点を作るという意味で世界中の各拠点で共通した認識を持っているが、具体的な活動や運営の面では考え方に違いがある。

ある拠点では直属の布教師をサポートする役割もあり、また天理教の活動としてその国に貢献することで文化活動は大きな意味をなすものであるという考え方である。一方、日本語教室を公に宣伝することはできず、看板も出すことはできない拠点では、文化活動として社会に貢献していくというより、会員に対していかに出張所の諸行事に参加してもらい、またいかに“にをい(匂い)”をかけていくかに重点を置くという考え方である。

つまり「文化活動としての日本語教育」を行い、布教を間接